

WHAT

フランス・ストラスブール大学

人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻
歴史文化学コース 博士前期課程
矢野裕香



「ヨーロッパの十字路」—これはケルト、ローマ帝国、ゲルマーニア、フランク王国という諸文明の影響を受けて、ヨーロッパの歴史を象徴する都市となったストラスブールが持つ呼び名です。ドイツ語の **Straßburg** (シュトラースブルク) すなわち「街道の街」の語源を持つこの都市は古くから交通の要所として栄えてきました。ドイツやスイス等近隣諸国への交通の便が非常に良いところから、現在でもその地理的重要性を実感することができます。フランスとドイツにまたがった様々な歴史資料収集を望んでいた私にとって、約5か月間の留学生活はまたとない好機であったと同時に非常に貴重な経験となりました。

授業の履修システムや留学生サポート体制は充実しており、異なる学部の授業であっても自由に履修出来ます。各学部に一人ずつ「留学生担当」の教授がいるため、履修に関する手続きの説明はその方から詳しく受けられます。専門に縛られず様々な学部の授業を履修できる点は非常に魅力的でした。しかし、授業について行くためにはコンスタントな予習復習を求められます。中間テストや期末テストの内容も、それ

までの授業内容の理解に留まらず、それを自分の言葉でわかりやすくまとめて伝えられる能力、さらには主題に対する自分の意見を述べる能力を問う、質の優れたものでした。留学生サポートに関して、大学生活における問題は大小問わず全て国際交流課の職員が担当しています。「何か問題・疑問が生じたらこの人に聞けばいい」という安心感が常にありました。語学学習は留学生個人の自律性に任されています。無料の語学学校が2種類、有料の語学学校が3種類あるため、自分の語学レベルや経済状況に合わせて最適な学習プランを自分で構築できます。

ストラスブール人の気質を一言に集約させるならば、「外国人を外国人扱いしないこと」です。大学生活においても、普通に過ごしていると、講義をよく分からないまま受講し、周りの流れに押されるようにして教室を出て行くだけなのです。助けを自ら求めないと状況が打開しないことは、外国人とのコミュニケーションに慣れていなかった私にとって、寧ろ自分を変える大きなチャンスでした。一度勇気を出して助けを求めると、フランスの方々は一蹴切丁寧にサポートしてくれます。先ほど述べた「外国人扱いしない」姿勢も、フランスの外側にいる「外国人」というよりも、「ストラスブールにいる人」という目私を見てくれたからではないかと感じます。このような内と外の区別意識をあまり設けない根底には、この地域の複雑な歴史によって形成された異なるものへの寛容性があるのかもしれない。そのような環境に約5ヶ月間身を置いた経験を、まさにストラスブールのごとく、自身の内と外を問わず有益な形で還元していきたいと考えています。